

# ニホンザルの母子行動

糸魚川 直 祐 (大阪大学人間科学部)

## これまでの研究について

本研究では、これまで次のような研究を行ってきた。

### 1. 母性行動形成に及ぼす生育歴の影響

この研究のねらいは、雌について出生から成体になるまでの生育歴を調べ、それと交尾などの繁殖行動や子の哺育などの母性行動との関連を解明することである。

研究の結果、次のようなことが明らかになった。

(1) 雌は4歳半の成体期まで母や仲間と共に集団内で生育すると、正常に交尾、受胎、子の哺育を行うことができる。

(2) 雌が未成年期の2歳以降、母や仲間から離されると、交尾、受胎、子の哺育に障害が生じる可能性があるが、この間、同年齢の雄と一緒に育つならば、正常に交尾、受胎、子の哺育を行うことができる。

(3) 4歳まで母のみと一緒に育った雌は、短期間隔離飼育された後、成体雄に出会うと、交尾することができず、母性行動にも障害があると推定される。

以上の研究結果のうち特に重要な点は、母性行動の形成にとって、幼少期から準成体期における異性の仲間との結びつきが大切な役割を果たしていることである。

### 2. 子の出生と母子の結びつき

この研究のねらいは、子の出生場面において、母子の行動や出生以後の母子の結びつきのあり方を調べ、さらに、子を哺育することができない母とその子の行動を比較することである。

研究の結果、次のようなことが明らかになった。

(1) 出産後、母は子を抱き上げ、腹位で抱き、子をなめ、毛づくろいをし、授乳をし、胎盤を食べという順序で哺育行動を開始した。

(2) 子は、手足指で母体を握る、開口しあくびをする、母体に四肢でしがみつく、乳頭を探索し、吸乳するという順序で母にかかわった。

(3) 隔離飼育により、子の哺育を行うことができなかった母は、子を放置する、胎盤に過度にかかわる、子を避ける、おどす、かむなどの行動を示した。

(4) このような母の子は、床に伏して手足指で物を握る、四肢をばたつかせるなどの行動を示したが、母が哺育しないため、人工哺育された。

以上の研究結果のうち特に重要な点は、出生後の母子の結びつきは母子相互間の行動連鎖に依存しており、なかでも子の行動が母の母性行動の発現を促していることである。

### 3. 母子分離と他個体との出会せ

この研究のねらいは、母子の結びつきができ上がった後に母子を分離し、さらに共生と分離を反復し、母子関係の変化や子の異常行動(常同行動)の発現を調べることであり、また、分離された子をさまざまな生育歴の雌に出会せ、相互作用を究明することである。

研究の結果、次のようなことが明らかになった。

(1) 母から分離された子は、常同行動を示すが、この行動の出現率は、子が母から分離されている期間が短かく、共生の期間が長いと、分離期において低く、共生期において減少の程度が著しい。

(2) 母から分離された幼少の子は、さまざまな生育歴の雌に出会うと、雌に接近し、接触を求めると、正常正育の経産雌は子に対し母性的行動を示すが、隔離飼育の未経産成体雌は、常同行動を多く示し、子を無視したり避ける傾向がある。

以上の研究結果のうち特に重要な点は、子の常同行動の減少に母との共生が有効であり、それは分離期間の長短に関係することである。さらに、幼少の子が母以外の雌に接近、接触を求めると、母性行動の異常を治療するのに役立つことを示唆する。

## 今後の研究について

これまでの研究成果をもとに、今後の研究課題を示すと次のようになる。

(1) 母性行動の形成と障害に関する雌ザルの生育歴の概要がほぼ明らかになったので、さらに生育歴の中での時期と内容を詳しくつきとめる。

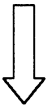
(2) 母子分離は子にさまざまな障害を生むことが明らかになったが、人間を含む霊長類の生活にとって、本来母子分離は不可避であり、母子分離が子の幼少のときに起こる事態が数多く生ずる。

このため、子の行動発達の障害にならない母子分離のあり方をサルによって実験的に探る必要がある。

(3) 子の行動は、母の母性行動をひき出すうえに重要な役割を果たしている。このため、母性行動の障害を治療するのに子の行動特性を詳しく研究しなければならない。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



今後の研究について

これまでの研究成果をもとに、今後の研究課題を示すと次のようになる。

(1)母性行動の形成と障害に関する雌ザルの生育歴の概要がほぼ明らかになったので、さらに生育歴の中での時期と内容を詳しくつきとめる。

(2)母子分離は子にさまざまな障害を生むことが明らかになったが、人間を含む霊長類の生活にとって、本来母子分離は不可避であり、母子分離が子の幼少のときに起こる事態が数多く生ずる。このため、子の行動発達の障害にならない母子分離のあり方をサルによって実験的に探る必要がある。

(3)子の行動は、母の母性行動をひき出すうえに重要な役割を果たしている。このため、母性行動の障害を治療するのに子の行動特性を詳しく研究しなければならない。